

編集後記： 2023年2月中旬、シドニー国際空港にて筆を取っています。というのも、メルボルンのモナシ大学で開催された会合に1週間参加した後、シドニーで乗り換えていざ帰国という時に、羽田便欠航という憂き目に遭遇したからです。次の便まで9時間という暇ができたので、この1週間を振り返る時間にすることにしました。

筆者は2022年末までの5年間、CLIVARの太平洋地域パネル（PRP）のメンバーとして活動をしていました。PRPは、ENSO、熱帯太平洋海洋観測、太平洋十年規模変動、太平洋沿岸気候など、太平洋にまつわる気候研究者が招集され、分野の方向性を議論し合います。近年は、太平洋の生物地球化学や海洋熱波などの分野にも袖を広げています。3年+延長2年の任期で、筆者にとっては2022年が最後の年でしたが、最後の3年間はCOVID-19のため対面の会合は叶いませんでしたので、今回特別に前メンバーとしての参加が許可されました。2019年以来の再会ということで、初日に顔を合わせた際の皆のテンションの高さが印象的でした。2日目からは、同じくCLIVARのTropical Basin Interaction Research FociおよびPRPの後援で活動するENSO conceptual models working group

（WG）も合流して、研究交流のセッションが開催されました。また、セッションの合間には、PRPを中心とするメンバーで太平洋十年規模変動のレビューペーパーを書き上げるというミッションもあり、筆者にとってはPRP在任時にやり残した最後の仕事でもありました。セクションごとの小グループで連日議論を交わしながら一文ずつ原稿を仕上げていく過程は刺激的でした。

上に触れた通り、CLIVARには、各研究分野の方向性に関する提言を行う「パネル」以外に、特定の研究課題に焦点を当てるResearch Foci、明確なゴールを定めて活動するWGといった活動があります。これらの各方面の動きにアンテナを張り巡らせ、日本の気候変動研究の将来を見据えていくことが今、日本の気象コミュニティに求められています。分野の将来を担ってやろうという志をお持ちの、特に若手の皆さまが積極的にこれらの枠組みに参入してくださることを期待しております。

最後に、今回の旅の思い出写真を「天気」Twitter (@TENKI_metsoc) にアップしておりますのでぜひお楽しみください。

（今田由紀子）